

# さわやかトカラ情報

一隅を照らす十島の教育

十島村教育委員会  
〒892-0822 鹿児島市泉町13番13号  
TEL 099-227-9771

## 1月・・・新成人を祝う会

十島村教育長 有村 孝一



新年あけましておめでとうございます。今年もよろしく願っています。平成27年が明けました。それぞれ希望に満ちあふれた新年を迎えたことだろうと思

います。今年、乙（木弟：きのと）羊（ひつじ）というそうです。羊は群れをなすところから「家族の安泰」を表すとされ、いつまでも「平和」に暮らすことを意味しています。「未」の干支の特徴としては、「穏やかで人情に厚い」とされます。また、財テクの才能があるとされ、財を成すのに向いている人もおおいそうです。

さて、今年も1月12日の成人の日に、多くの関係者の皆さんの出席をいただき、十島村「新成人を祝う会」が開催されました。今年の新成人は、二人の山海留学生を含む9人でした。そのうち4人の皆さんが出席していただきました。祝う会は、はじめに村長が、「皆さんをここまで育ててくれた両親や家族に感謝し、人のためになることに力を注いでください。そのことが、あなたの周りを明るくし、平和な社会を作ることになるのです。」「これからは、さまざまな方々のおかげで、今日の自分があることを忘れず、これらの人々への恩返しを自覚しながら、胸を張れる社会人になっていただきたい。」などと式辞を述べられた。

次にトカラふるさと会長の日高利成さんが、「これから、大人としての生活が始まりますが、フェリーとしまの航海のように、風のときばかりではありません。時化もあり、大波に阻まれ順風満帆とはいかないのが人生です。それを乗り越え前進してください。」「トカラふるさと会にも是非出席していただき、若い力を吹き込んでいただきたい。」とお祝いの言葉を贈りました。その後、新成人を代表して、平島中学校卒業の星野菜穂子さんが、「心のふるさとである島を誇りとして、後輩の希望となるような社会人を目指します。」と決意を述べました。他の3人もマスコミの取材に対して、清田さん（口之島）は「情報関係の勉強をしているが、しっかりと身に付けたものを生かした職業に就くのが目標です。」小林愛弥さん（中之島）は「両親にもたくさん迷惑をかけてきました。これからは、

恩返しができるよう頑張りたい。」山海留学生の日高圭惟さん（平島）は、「高知に住んでいるが、中学時代を過ごした十島村の自然が思い出に残っています。自分の子どもも是非十島に留学させたい。」などと話していました。祝う会は、祝儀の舞、「十島のうた」斉唱で無事に終わりました。その後、吉野公民館長の中野健作先生による「みんなと共に自分らしく生きる」という講演がありました。宝島小の卒業生でもある先生の子どもの時代の話や、新成人へのはなむけのメッセージとなりました。9人の皆さんのこれからの活躍を祈ってエールを贈りたいと思います。祝う会は、TV会議システムにより島へも流されましたが、画像などが小さかったり等で、見にくい部分があったようです。今後それらのことを含めて善処していきたいと思

## ★新成人4人の決意★

「新成人を祝う会」が、1月12日（月）10時から、十島村役場で、新成人やその恩師、新成人の家族や親類、トカラふるさと会や村長、教育長など役場職員等約40名の参加の下、盛大に行われました。4人の新成人が出席してくれました。二人は鹿児島市内、後の二人は、大阪府と高知市から駆けつけてくれました。この日、成人式が行われたのは十島村だけで、多くの報道陣が訪れ、4人は、かなり緊張気味のようでした。「式典」に続き、講演会、記念撮影や祝賀会が行われ、4人の新成人は、5年ぶりの恩師との再会やお祝いの言葉に、懐かしさと成人を迎えた感激で、胸が一杯のようでした。



## シリーズ——十島の学校にやってきて 灯 口之島小学校3年 中村 真波 「いつも笑顔で」

わたしは、二年生の時に口之島小学校にきました。口之島は、海や山がとてもきれいです。楽しいこともいっぱいあります。その中で2つ紹介します。

一つ目は、友だちと遊ぶことです。鬼ごっこをしたり、みんなが笑顔で遊べるととてもいい気持ちになります。二つ目は、敬老会で着物を着て踊ったことです。敬老会に向けて、夜に踊りの練習をしました。踊りを覚えることが大変だったけどせんすを使って踊る楽しさと練習してできるようになりました。本番で、おじいちゃん



とおばあちゃんの前で踊ることはきんちょうしたけれど、二人の笑顔を見ることができて、わたしも笑顔になれました。これからも口之島で笑顔で過ごしていきたいです。国文祭作文コンクールで十島村から二人入賞！（総数1,631点中18点が入賞）

## 宝島中学校小宝島分校1年 森 祐太 入選「僕たちができるおもてなし」

2015年に、30回目の国民文化祭が鹿児島県で行われます。国民文化祭とは文化の祭典で、鹿児島県の各地で様々な催し物が予定されています。イメージキャラクターが作られたり、テーマソングが作られたりして、着々と準備が進められています。この催しをきっかけにたくさんの人々に訪れていただき、鹿児島県がさらに活性化するといいと思います。他県や外国の方などにももっとも鹿児島を知ってもらうためには、この地の特色を生かして、心からもてなすことが大切だと思います。

例えば、温泉などの観光資源をアピールすることやその場所でのれる特産品、その地に伝わる郷土料理などを利用すれば、町おこしや村おこしにつながると思います。

僕の住む十島村でも国民文化祭の期間中は、たくさん催しが開催されます。僕が住んでいるのは、十島村の上から6番目の島、小宝島です。面積が約一平方キロメートル、周囲約4キロメートルというとても小さな島です。お店が一軒もない、フェリーも週2回しか来ない、金融機関もないなどの不便さもありますが、たくさん自然に囲まれているという良さもあります。集落や学校からもすぐに海が見え、その透き通った海にはたくさん種類の魚たちが暮らしています。ほかにも、島にしかない種類のトカゲや、南国風の植物と、珍しい種類の動植物も数多く生存しています。その他の見どころとしては、風で岩がけずられ、いろいろな形に見える奇岩もあります。一周道路が2キロメートルしかなく、道も平坦なので、歩いて30分くらいで島のすみずみまでまわることが可能です。

そんな小宝島でできるおもてなしを考えてみました。まず、温泉を生かしたおもてなしです。小宝島は火山性の地形に恵まれ、温泉が湧き出しています。その温泉から作っている塩もあります。露天風呂に入っただけのもいいと思うし、その塩を使った新たなお土産を作り、喜んでもらうのもいいと思います。

もう一つは、島でとれる特産品を使用したおもてなしです。小宝島に伝わっている郷土料理は、ビーナッツ豆腐、長命草の天ぷら、やきもちなどです。料理と一緒に作って味わうのも楽しいと思います。また、新たに島バナナやハイビスカスなどを使った菓子作りなど工夫してみるのもいいと思います。



最後は釣りやスキューバダイビングなどの島ならではのレジャーを楽しんでもらうことです。釣れる魚は季節ごとに異なり、おもしろい釣りができます。釣った魚をさばいて刺身にしたり、焼いたり煮たりしてすぐに食べることもできます。雄大な海の中を泳ぐこともとても気持ちいいです。春にはトビウオすくいができ、そのトビ



ウオを追って大きな魚がやってきました。大物釣りに挑戦するのもおすすめです。僕も釣りが好きなので、いっしょにたのしみたいです。その他にも、訪れた方々といっしょに島をまわって島の見どころを案内したり、小宝島の歌「小宝島慕情」を披露したり、運動会で好評だった応援「小宝魂」を見せたりして歓迎したいです。資源や特産品を工夫して利用することは、自分たちの住む場所の知識を得て、活用ができないか考えるよい機会になります。そして、この地に住んだ人々が残してくれたものを大切に伝えていけたらいいと思います。

このようなおもてなしができれば、きっと相手に届き、鹿児島のことをもっと好きになってもらえると思います。国民文化祭を機に、ここからのおもてなしの心が広がって、もっと活力のある小宝島、そして鹿児島になってほしいです。（\*もう一人は、次号2月号で紹介予定）

## 十島村の小・中学校からのメッセージ ㊦

中之島中学校 教諭 上東 唯

「教育の原点」を感じることができる学校だ。中之島への赴任が決まった日、多くの先輩方にそう教えられた。初めて聞いたときには、「教育の原点」という言葉が何を表すのかはわからなかった。

中学校での勤務経験しかないわたしにとって、この中之島小・中学校で最も衝撃的だったことは、小学生、未就学児との日常を送ることだった。予想もつかない行動に出たり、こちらの意図していないことで笑ったり泣いたり、毎日が驚きと発見の連続だった。2年目を終えようとしている今となっては大分慣れたが、昨年度は何度も職員室で「小学生って難しいですね。」と小学部の先生方にこぼしたものだ。

小学校への乗り入れの授業を経験して、これまでの授業や指導法を見直すことの多い2年間だった。語句の意味を辞書で調べるときにきらきらした目、心を込めた音読、たどたどしくも一生懸命毛筆に励む姿。1つのことができて嬉しいと思う心を思い出させてくれたのは、この学校の子どもたちだった。

その度に思い起こすのは、前任校で出会った中学生たちだ。私は彼らの中学生としての3年間しか見ていなかったように思う。彼らが、未就学児のとき、家庭や地域にどんな風に育てられてきたのか、小学校6年間でどんな風に大きくなってきたのか。この学校では当たり前に見える部分が、前任校ではなかなか見えなかった。だからこそ、自分から見ようとしなければいけなかったのだ。その視点をもっていたなら、今まで出会ったたくさんの中学生たちに、もっと違った接し方ができたのではないかと思う。

大事なことに気づかせてくれたこの学校は、確かに、わたしにとって「教育の原点」になりそうである。

教職員仲間である「あなた」への  
私からのメッセージ

他のどの学校よりも多くの発見があるのが十島村の学校だと思っています。